西之内町新調地車
実行委員会通信

2023年
6月号

新調通信に関する御問い合わせ
西之内町会館
072-444-7712

西之内町新調地車

彫刻の物語背景と紹介（２５）
～大坂夏の陣・家康本陣急襲～

梅雨明けの待たれる霖雨の候、西之内町の皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。梅雨が明けると本格的な夏の到来となりますが、新調地車の完成もいよいよ間近となってまいりました。これから完成まで手の抜くことの無いよう委員会一同、頑張っていく所存でございます。

さて、今月の『新調通信』は「大坂夏の陣」の物語をご紹介いたします。

元和元年４月、すでに大坂城は裸城同然で、大坂方に勝ち目がないことは歴然でした。真田幸村は父祖伝来の兵法を天下に誇示し、討死にすることを覚悟していました。

５月７日未明、夜が明け始め視界が明いてくると、茶臼山には朱赤に染められた旗に六連銭が描かれた幟が、風に揺られはためいていました。それは真田幸村の軍勢を示すものでありました。勇猛を轟かす其の六連銭の幟を見た松平勢は、武者震いを隠せませんでした。忠直の兵力はおよそ一万三千四百。右備えに山本内蔵助、多賀谷左近、本多丹羽、笹治大膳、高屋越後、荻田主馬がつき、左備えに忠直の次弟伊予守忠昌、出羽守直政、本多伊豆富正、山川讃岐、落合美作がつきました。

真田幸村隊（赤備え）

軍監本多正重が派遣され、開戦は急がぬようにと厳命されると、機が熟する時を待ちました。東軍も開戦は昼頃になるであろうと見越しておりました。幸村も同じく開戦は昼ぐらいと考え、秀頼公の出馬を迎えて全軍一団となって飛び出す策を描いていました。しかし、毛利勢の前面に対する本多忠朝隊が、早くも鉄砲を浴びせたため、開戦の火蓋が切られてしまいました。幸村との打ち合わせのため、茶臼山の真田の本営に来ていた毛利勝永は慌てて応戦を止めるべく急いで戻りましたがたが、動き出した歯車は止められず、思うより早い戦いは始まってしまいました。

「我が策台無しじゃ」と幸村が嘆く中、できるだけ敵を引き寄せてから鉄砲を放って松平勢の進撃を阻止しつつも、もはや猶予はならぬと全軍突撃の采配を揮りました。真田勢とともに滞陣していた渡辺内蔵助糺、福島伊予守正守、同兵部少輔正綱、大谷大学吉胤等の隊が忠直隊に突進し、たちまち激戦となりました。隣では毛利勢と対している浅野長重、秋田実季、松下重綱らの諸隊が蹴散らされ、忠直の右陣営内に退いて来たからたまりません。兵力的には有利なはずの忠直の陣形が崩れていきます。真田勢の石川泰勝と結城勝朝の隊は毛利勢と協力する形にて小笠原勢を破り、大混乱に陥しいれました。

幸村は後方を振り返りました。しかし、秀頼公の大旆はまだ見当たりません。「まだ御出馬ならぬか」と思った幸村は、大野治長の元へ使騎を走らせ出馬を促します。しかし、治長の元を注視しても何ら気配は感じられません。もう刻は残り少ないと感じた幸村は子である大助を呼んで命じました。「幸綱！そなた今一度城中に参り、右府

公に即刻御出馬あらせられるよう申し挙げよ。手負いたる身にては思うような働きもできまい。城に参らなば其のまま右府公のお側に留まり、涯分の働きを励むように。」と言って大助を秀頼の元へ向かうよう仕向けました。

大助の瞳には別れの涙が流れておりました。「はい。父の仰せに従い、城中へ罷り帰り、秀頼公の御出馬叶えまする。」

真田隊は毛利勢の奮戦もあり、忠直勢の布陣を打ち破り家康の本陣へ一直線に目指しました。

遠くに家康本陣の大旆が見えると「あれこそ大御所の本陣ぞ。者共続けー！」幸村は信州旗本衆を従えて疾走しました。

家康の本陣に侍るのは小栗正忠ただ一人。槍奉行の大久保彦左衛門忠教が旗奉行に代わりて旌旗を守護する立場となり、家康はさすがに怖気づき、生きた心地がせず旗本衆に喝を飛ばして前面を守らしめ、さらには遥か前方にまで繰り出している旗本衆を呼び返すよう命じました。

馬上の幸村は人間わざともおもわれぬ槍さばきで敵を突き崩しました。愛馬の月影は、腹をしめつける幸村の股の感触ひとつで、主の手足のごとく動きます。逃げ足となり、手薄となった徳川勢を一気に突き破った幸村は、約五十騎の手勢をひきいて、猛然と家康の本陣へ殺到しました。抱角の兜こそかぶってはおりませんが、幸村と同じ緋縅の鎧をつけ、唐人笠の馬印と共に数人の戦将が「大御所の御首頂戴！」「御首頂戴！」と呼号しつつ四方へ散りました。九度山以来の幸村の家来である高梨内記・三井豊前・青木半左衛門などが、十余名の兵と共に影武者となり、家康の本陣を目がけて突撃します。それこそ、あっという間もなく本陣の低い丘の下にいた約五百の家康の旗本たちは、真田勢のあまりに猛烈な攻撃に、大御所の徳川家康の身を護ることさえ忘れてしまいます。恐怖だ。怖いものは怖い。赤色の魔神の一隊が旋風のごとく襲いかかりました。

家康の金扇の馬印が合戦中に倒れるのは、武田信玄公と相まみえた三方ヶ原の合戦以来２度目であります・・・この場面を新調地車にて表現しておりました。その数々の彫り物製作の工程がいよいよ千秋楽を迎えようとしております。

植山工務店さんでは、地車の腰回りの組み立て工程に入っております。また、先月に引き続き、見送りの天井から小屋根の組み立て作業にも取り掛かっております。全体の工程の遅れもなく順調に進んでおります。

新調地車が少しずつ姿を現しており、改めて歴史に残るプロジェクトに携わっていることに身震いします。

完成入魂式まで残り２か月と少しの期間です。引き続き、ご支援のほど宜しくお願い申し上げます。

金扇の馬印

新調地車の彫り物および本体組立進捗報告

６月に入り、山本師の工房では、見送りの馬乗り、人物の仕上げ作業および懸魚の仕上げに入り、残りの作業も数えるほどになってきました。西之内町や兵主神社にまつわる物語の神様や人物が、彫刻により姿

新調委員の独り言

６月１８日、泉佐野市上之郷上村にて西之内町先代地車の入魂式が執り行われました。新たな幕が上がったと、感慨深いものを感じました。改めてその姿見や彫り物を見て、非常に値打ちのある地車であったことを再認識いたしました。

地車新調実行委員会のホームページも、リニューアルを検討しております。

各方面からのご寄付についても引き続き受け付けております。お問い合わせは、西之内町会館までお願いします。

西之内町地車新調実行委員会　検索

『新調通信』のバックナンバーはホームページからご覧いただけます。